

蕪村の特集雑誌を見ている、いつも図書館で借りる別冊太陽・平凡社・与謝蕪村、いろいろな特集があつて気に入っている。蕪村のカラスの絵も載っている。何時も自転車に乗って大阪市内に行く時は毛馬の閘門の辺りから淀川を左に逸れ中の島の方に向かうがその曲がり角に蕪村の石碑がある。次の事が載っていた。

春風や 堤長うして 家遠し

余幼童之時 春色晴和の日には 必友どちと此堤上にのぼりて遊び候 水には上下の船あり 堤には往来の客あり

「春風馬堤曲」という俳句と物語が合体したような文章がある。春の日に毛馬辺りの淀川の堤を歩いていると、艶やかな娘も歩いている。話しかけて聞いてみると、勤めている大阪の店の休みの日（藪入り）郊外の実家に向かうようだ。花を摘んだり、茶店に入ったり、猫の恋を見たり、お母さんを思い出したり、弟を想ったり、もうすぐ家だ。という物語かな、一部紹介。

春あり成長して浪花にあり 梅は白し浪花橋財主の家 表情まなび得たり浪花風流（ブリ）

訳：幾春を重ね今娘盛り、華やかな浪花の町に居ます。梅が白く咲き香る。浪花橋辺りの長者様に身を寄せている。すっかり浪花ファッションを装い、色香もある。

京に住む蕪村が大阪に行く事を浪速下向というらしい。淀川の船便を利用する。今では考えられないが 100 年前までは淀川は京と大坂を結ぶ大交通網だったのだ、特に物資輸送ということでは船がいいらしい。伏見の湊から半日の旅。競馬場のある淀で木津川・宇治川・桂川の三川が合流する処に大橋・小橋・孫橋という三つの橋があったらしい。次に左岸に八幡の山、右岸に天王山、少し下って右岸に高槻の葦で有名な鶴殿、左岸に橋本、くらわんかの枚方、右岸にオレが幼少の頃住んでいた鳥飼、次が平安時代から有名な江口の里、左岸の街道筋、橋本、枚方、守口は宿場でもあったらしい。間もなく毛馬、左に曲がって源八の渡し降りると天満宮、桜宮、近松浄瑠璃で有名な網島、天満橋をくぐって八軒屋が終点、今では水路で移動なんて考えられないが船を利用するとこんな感じだな。逆の大阪から京までは水の流れに逆らうから時間は倍かかったそうだ。しかも船頭が竿を操るだけではなく途中何度か陸から引っ張って遡行を助ける労力を必要としたそうだ。

その本に 京・大坂を貫く淀川は蕪村の精神の支柱であった。と記されているのを読んで、同じくオレも淀川は好きだと嬉しくなった。

昨夜は飲んだ。刺身が出たので日本酒の燗酒を頼んだら二合徳利が来てちびりとやった。牛肉も来た。普段はあまり肉を食べないが「飲まないで鍋奉行をしてやる」と先輩、シャブシャブとして「ハイ肉」「ハイ野菜」「ハイ葛切り、これは 10 秒で上げる」とやさしく皿に入れて下さりおいしくいただきました、旨いとおいしく飲みました。自転車には乗って帰っているようだがその道中は覚えていない、記憶が飛んでいる、失礼がなかっただろうねと、バタンキュー。朝は 5 時に目が覚め眠れない、深酒の翌日は眠りが浅く早く目覚める、身体はだるい、気力が無い。資料の整理やら修正やらの雑用をしてから、画廊と十三の友人宅に行く決めていたので 10 時過ぎに自転車で出発。安威川を越え鳥飼小学校から淀川右岸の河川敷道路に入り、下流に向かって海の方に走り出した。風がきつい、向かい風が吹いてくる、スピードが出ない、昨日の酒がまだ残っているのか、寝不足がたたっているのか、今日は体力が元気が無いのか、吐く息も荒く、ハアハアとバテぎみだ。いつもは毛馬まで 1 時間と思っていたが今日はなかなかだ。ホームレスのブルーシート的小屋が残る中ブルドーザーが河川敷を均している。スーパー堤防、河川敷公園、ゴルフ場、野球場、サッカー場と次々できていくがその隙間に少しだけ昔のワンドがあった、昔ながらの澱んだ水溜りというより池だ、これを見るとホッとす、なつかしい、昔の淀川はワンドだらけだった。展覧会の案内状を届けるのが今日の

目的、西中島南方にある画廊でコーヒーを、友人宅でジュースをごちそうになり再び塚本辺りから河川敷。帰りは風に押されてもうスピード、雨もやみ3月なみの暖かさだそうですね。帰りは風

に押されてもうスピード、雨もやみ3月なみの暖かさだそうですね。帰りは風
図版は蕪村のカラスの絵、借りた本を見て絵師として蕪村はすごい絵がいくつかあると再発見。とはいえ蕪村の俳句は知らない、口遊（づさ）まない、俳人としてもすごい人のようだけれど。

13-010 与謝蕪村-Ⅱ 080213

前回の続き。与謝蕪村-別冊太陽の中に、荻原朔太郎「郷愁の詩人・与謝蕪村」が載っているのを読みなるほどすごい、おもしろいと感動、共感した処があったので紹介します。とはいえ、えらそうなことを申しますが俳句も詩もわからないオレ、朔太郎が言っている事のほとんどがわかっていないのかもしれないが読んでください。

君あした去りぬ

ゆうべの心千々（ちぢ）になんぞ遥（はる）かなる。

君を思う岡の辺（べ）に行きつ遊ぶ。

岡の辺なんぞかく悲しき。

これが百数十年も昔（朔太郎 1886~1942 55歳で没：蕪村 1716~1784 68歳で没）俳人、与謝蕪村の新体詩の一節であることは、今日僕らにとって異常な興味を感じさせる。実際こうした詩の情操には何らかの新鮮な、浪漫的な、多少西欧の話にも共通する処の特殊な瑞々しい精神を感じさせる。そしてこの種の情操は江戸時代の文化に全くなかったものである。〈略〉

蕪村の句の特異性は色彩のトーンが明るく絵の具が生き生きしており、光が強烈である事である。そしてこの点が彼の句を枯淡な墨絵から遠くし、色彩の明るく印象的な西洋画に近くしている。

陽炎（かげろう）や 名も知らぬ虫の 白き飛ぶ

更衣（ころもがえ） 野路人は つかに白し

絶頂の城に たのもしき 若葉の人

鮒鮓（ふなずし）や 彦根が城に 雲かかる

芥川龍之介君と俳句を論じた時、芥川君は芭蕉をあげて、蕪村をけなした。その理由は、蕪村が技巧的作家、単なる印象派の作家であって、芭蕉に見るような人生観や主観の強いポエジイが無いからだということだった。室生犀星君も同じような事を蕪村に関して語っていた。そして今日の俳壇の多くの人は、好悪の意味を別にして等しくみな同様の観察をしている。〈略〉

今や蕪村の俳句は、改めて鑑賞され新しく再批判されねばならない。

蕪村は単なる技巧スケッチ作家ではない、蕪村こそ強い主観を有し、アイデアの痛切な思慕を歌った処の真の抒情詩人、真の俳句の俳人であった。

詩人蕪村の魂が詠嘆し、憧憬し、永久に思慕したアイデアの内容、彼のポエジイの実態、それは時間の遠い彼岸に実在している、魂の故郷に対する「郷愁」であり、昔々しきりに思う子守唄の哀切な思慕であった。

これを読んで、皆様どう思います？江戸から明治へと時代が変わって西洋の文学、絵画、音楽が怒濤のように押し寄せ、それまでの日本のもの、東洋のものとは違った新しい表現、新しい技巧、新しい感性、全く違う考え方、想い方が押し寄せ、そんな時代に我々がよく知っている傑物達が輩出された、湧き出た。元来日本に在ったもの、古いもの、古い時代、古い表現と言われ歯ぎしりしながら元から在ったものに関わっていた人たちの存在、これこそ新しい、こ

れが本物だ、これからはこれしかないと言っていた人達が渦巻いていた時代だったのだろう。それこそ「白か黒」「正か悪」と二つしかなく叫びあっていたのかもしれない。ただこの極端さ、ある意味新鮮だが、時代が下って今オレは廃仏毀釈がいきすぎたかなと思う。

朔太郎が蕪村の事をこのように書いているのには驚いた、内容も面白い、「それはないぜ」と思う処もあるけれど、ただ色彩、絵の具と単語が飛び交うのに、蕪村の絵の事が絵の話が語られていないのが不思議。

13-011 雪かき 120213

「今年は雪が少ない、あれだけ寒波、豪雪と報道されていたのにあれはなんだったんだろうかね、大雪は北海道、東北地方だけなのかな」と話しながら目的地のインターチェンジ金沢・森本が真近に迫るが路面の舗装が見えている、アスファルトが灰色に鈍く見える、雨なら路面がより黒く、雪が積もれば真っ白に、雪が凍れば白く鈍く光るのに、この舗装の色はただのアスファルト色、曇り空を写す鈍いアスファルト色だ。今日のこの辺近、道路の右も左も、家々の黒瓦の上に白い雪が乗っているが田圃も道も白くない、所々に雪だまりが、雪の固まっている処があるぐらい、そこだけが白い。「ひょっとしたら今年は雪が無いかも」と今から行く家の持ち主、久子さんが運転しながら呟く。オレは、えええ！せっかく来たのに雪が無い・・・と複雑な気持ち。「雪が無かったらラッキー、こんないい事は無い、雪の無い冬なんて久しぶり、此処に住んでいる人たちは喜んでいよう、毎日毎日朝目覚めたら玄関ドアから道までの雪かき、屋根から落ちた雪の片づけ、ジュークジュークシャーペットの道、そんなこながいつぱんに無くなる・・・」それでもインターチェンジを出て10分20分高度をあげて走ると雪が徐々に増えてくる、屋根の雪も道路の雪も白さを増してくる。此処に雪かきに来るのも三年目、国道を走りながら目的地の家が見える、建造後何十年も経った古い家だけれども本格木造瓦葺の建物が並ぶ。「並ぶ」とは言え前後左右の敷地は大阪の“並ぶ”とは違って車が何台も停められるスペースが充分にある。なんと今年は家の前までスイスイ車が入っていける、そのまま歩いて鍵を差し込めた。というのは昨年も一昨年も除雪のブルドーザーが雪を削り運び細い道の両サイドに雪を盛り上げ、坂道の真ん中はツルツルに凍ってスッテンコロリを免れない、転ぶ怖さにそろりと歩いていた。家の前に車を止め玄関ドアまでの10メートル雪かきをしないと入れない。人の住んでいない家では、普段は雪の積もり放題、雨が降りまた雪が積もり、屋に溶けて夜に固まりを繰り返して、腰ぐらいまで積もった雪は堅い、その上を平気で歩ける、潜りはしない。去年は家のドアを開けるまでに長靴にはき替え車のトランクに入っているスコップを取りだしドアの前の雪を取り除く作業をしなければならなかった。ところが今年は車を止め靴が潜るぐらいの雪を踏んでそのまま玄関ドアの鍵が開けられた。「これでは本当に何もしなくてもいいのでは、雪かきをしなくてもいいのでは」と思わせ振りに出迎えたけれども、家の横は腰ぐらいの高さまで屋根の雪が落ちて積もっている。「こいつはやっつけなければ」と仕事があつてよかった、雪かきができてよかったと内心安堵、しかしそれにつけても今年の雪は少ない、去年は家の横の雪は底の下まで積もっていた、雪の一番高いところはほぼ屋根の庇に届いていた、それに比べれば今年の積もり具合は遥かに少ない。

スコップはアルミ製だけれども堅い雪は鉄製のスコップをねじ込んでクイツと持ち上げないと崩れてくれない、それこそ文字通りアルミ製のスコップでは歯がたたない、アルミ製のスコップが潰れてしまう。崩れた雪をダンプという物、プラスチック製のチリ取りの大きな物に乗せ横の川まで運んで捨てる。スコップで崩す、ダンプで運ぶ、川に捨てる、その繰り返し、何回も何回もその繰り返し、1時間経ち2時間経ち、少しずつ雪かきが進んでゆく、水に投げ入れた雪は流れに任せてどンドン下流に消えてゆく。

冬の日本海側は毎日が曇り空、どんより曇って、冷たい雨か雪が降る、晴れる日が、太陽の顔を見える日がなかなか無いそうだ。大阪でもオレの住んでいる処は、陽が燦々、晴れている時が多いが、5キロも山の方に行くと曇っていたり湿っていたり小雨が降ったりしている。日本海はそれどころかもっともっと曇り空が覆っているようだ。

ただ悪い事ばかりではなくて、魚が旨いコメが旨い酒が旨い。食料品店で買った小さいアジフライ、大阪ではソースをかけても臭みが残るが、何の臭みも無く旨いとこれには驚いた、刺身もいただいた、昆布締めもいただいた。温泉もたくさんあるようで、皆さん楽しんでいる、風呂の中でふ～らふらだ。履物は皆さん長靴、今はお洒落な長靴が揃っているのだそうだ。

13-012 医王山 150213

医王山と書いて、“いおうぜん”と読む。“いおうざん”とばかり思っていたが地元の人が話しに聞こえてきた。昔この山には薬草が生えていたようだ。雪のない季節の写真を見ると、穏やかなハイキングの山だ。

晩秋に降った粉雪が根雪となりその上にボタン雪、湿った大粒のボタン雪が降り徐々に積もっていく。標高千メートル足らずの低い山だけれども豪雪地帯富山県の日本海に近い此処はたっぷり雪が積もっている。今年初めて雪が積もった山に入る、去年の6月以来の雪の山、「ええと、あれっと」いろんな事を忘れている。なんだそんな事かと笑われるかもしれないが永年「こうして次にこうするのだ」と決めていた事を忘れている。スパッツの右と左はどっちだったのかなと見分け方も忘れている。今のスパッツは不良品なのか、なかなかすなりとファスナーが嵌らない上がらない、何度か入れ直してやっとスルリと上に行く。今時ファスナーの不良なんてと不思議に思うが、持っているヤッケの2点がやはり嵌らない上がらないと山を歩きながら、自然の真中で苦労をしている、格闘している。ヤッケ、スパッツ、シラフ、テント等とファスナーがたくさん使われているがスルリと上がらない、不良品ばかりでどうしようもない。その点ズボンのファスナーが潰れた事はない、ただこれが潰れると大きな顔をして街を歩けないね。と話は飛んだが、手袋を嵌めピッケルを持ってリュックを担ぐという順番ではだめなのだ、さあ休憩と止まって手袋をはずしピッケルを置くとリュックが引っかかってしまう。思い出した、まずはウエストポーチを腹に着け前にまわす、リュックを担ぐ、手袋とオーバー手袋を嵌め紐を首に掛ける、その前にヤッケのフードを被っておく、ピッケルを持って紐を首に掛ける、この順番だ、こんな些細なことだけれども間違えると次がややこしくなる、と下らん事にこだわっている。

エッチラオッチラ 2 時間の登り何度もズボリと足が潜った、膝まで潜ると大汗かいて引き抜く、ひどい時には片足のつけ根まで潜り足を引き抜くのに一苦労、まずもう片足を膝まずいて潜った足をガサガサゴソゴソそれから力を入れて抜く何度か試みてやっと抜ける、とにかく潜ると足を引き抜くのにどっと疲れる。今回は潜るだけだけれども、斜面に踏み跡が無い時は階段を作らなければいけない、これをラッセルというが、急斜面のラッセルはオレのような年配の山屋さんにとっては大仕事、今回の潜るぐらいいは良しとしなければとエッチラオッチラ。一瞬太陽が見える事もあったがほとんどドンヨリ曇り空、ちらちら雪が降り、これは積もりそうと思われるような強い雪が降る。麓が少し見える事がある、富山県は穀倉地帯、田圃が広がっている、雪で真白になった田圃が続いている。雪国のこの地方の住宅は立派だ。柱・梁、白壁・土壁・板塀、屋根は黒瓦。今の季節自然の中はほとんどモノトーン、白と黒とグレーばかりだけれど、そんな中に鮮やかな緑色の葉っぱ、赤茶色の木の幹が雪を被って顔を見せている。どこかで昼飯と風の緩い処を探した、ほとんど雪に埋まった屋根付きベンチを探した、湯を沸かしてカップラーメンに注いだ、握り飯を食べた、ラーメンを啜った、冷え切った身体に熱い汁は腹に沁みる、旨い、甘露。

下山しようと降り始めると人が居ないと思っていた小屋に人が居た。「温まっていけば」の一言に甘えて入ったら風呂桶ほどのストーブに薪が焚かれて側に寄ると熱いほどに燃えている。中には10人以上の男女の方、みなさん地元の人で小屋を管理し、暖かい時に薪を運び込んで今の快的空間を作って今晚はこれから大宴会だそうだ。「ずぼ足で来た、それはすごい」と靴だけで登って来た事を言っている。「ずぼ足」とは“ズボリ”と潜るが語源と思うが辞書を引いて

も載っていない、もしや外国語かなとも、というのは雪崩の後を見て「“デブリ”だね、」と澤山さんが言っていたので調べてみたらフランス語だったなんてことがあったのでこれもしやと思った。この山はこの季節輪標（わかんじき）を着けるのが定番らしいが、オレは着けてない靴だけだ、輪標は持ってない、なので膝まで何度も潜ってえらい思いをしんどい思いをした。輪標があるとスイスイ歩けたのかなと、思い出したのが亡くなった阪口さんから形見分けにアルミ製の輪標をもらったが全く使わないので捨ててしまった、残念な事をした、あれがあればこういう山はルンルンと歩けのかも・・・。

13-013 伝統文化 190213

先日萩原朔太郎の文章を読んで、彼が、俳句にはなじめない、俳句は嫌いだ、俳句の中で表現されている侘び、寂び、枯淡の世界に共鳴できない、というような事を言っていたように思う。これを読んでオレも若いころならこれは分かる理解できると感じたと思うが、還暦過ぎたおっさんになってしまった今は少し違和感を感じた。

オレは若いころから油絵を学んできた。油絵はヨーロッパから始まった画法・技法だ、ほとんどの日本人が幼児教育の時点から西洋画、西洋音楽が正規の授業として教えられ、習ったと思う。ところが皆さんご存じのように、当たり前のことだけれども日本には日本古来の絵も音楽もあった、東洋と言われる近隣の国々にも古来からの絵や音楽があった。むしろ日本古来日本の伝統と思われているこれらのアートは、ほとんどのアート・技法は中国、朝鮮等の近隣諸国から移入された。朔太郎は100年前の人、明治に活躍した人とはばかり思っていたがオレが生まれてからも生きていたのには驚いた、とこれは余談の話。明治になり新政府になり、欧米の文化文明に目が向き、それらを取り入れよう、追いつけ追い越せと躍起になったその流れの反動で、それまで日本にあったもの、伝統文化文明を疎ましいと拒否したと思っている

正月気分も飛んでしまった今頃、周りの隣国のあちこちで旧正月を祝う行事を目にする。明治以前の日本も含めて東洋の国々は何世紀も陰暦の旧正月を祝ってきた。日本は西欧に習って新暦で正月を祝っているが、周りの国々は今でも旧正月を祝っている、というより旧正月という言葉自体がおかしく「正月」そう堂々と正月を祝っている。オレも若い頃は「これは遅れているからだ、未だに旧正月か」と半分馬鹿にしたような、蔑んだ意識があったがこれが本当に正しかったのかなと今は思う。正月が30日、40日ずれて150年も経ったら、今さら元に戻せないのでは仕方がないが、東洋の近隣諸国と同じ方が良かったのではと今更に思う。

ところがそんな拒否の姿勢にもめげず、まだまだ日本の伝統文化文明、文学、絵画、音楽、芝居、演劇あらゆる分野が盛んに行われている、頑張っている、滅び去ってはいない。朔太郎の話に出てきた俳句・俳諧も詩の愛好者よりもずっと多くの人たちが楽しんで創っている、学校でも古典文学を教えている。学校では教えないが、能も猿楽も歌舞伎も盛んで人々は大枚の金を払って観劇に出かける。踊りもお花もお茶も盛んだ。ほとんどが在野の世界で生き生き芽を吹き生い茂っている。元気盛んだ。思想・芸術・芸能の世界、国やら自治体やらが管理、指導、口出しするのはよくない“アカン”というのがオレの口癖。当然のことだけれども思想・芸術・芸能は一般大衆のその力その財力その思考に依って自然に盛衰するものだと思っている。

明治時代に西欧文明文化が移入され日本人はそれらを取り入れること、理解すること、自分のものにするに邁進したが、その分、今まで日本人が持っていた物、日本伝来の伝統の物を破棄し蔑む風潮があったと思う。オレも若いころはその比重は、素晴らしいと思うのは西欧のものが多かった。100年前西欧の詩を賛歌していた朔太郎が西欧の文学に接し触発され同じような表現方法を選んだ、同じような詩を書いた。そして俳句なんかはつまらんといい、といえど専門家先生に笑われるかもしれない、それは違うぞと言われるかもしれないが、オレはそう思う。

絵に関してオレは今、洋の東西南北を問わず“いいものはいい”と思っているし決めている、このことは今のオレ、鼯もクルイもない。それとも、クルイっぱなし、おおいにクルッているかもしれないが。先日も見た蕪村の雑誌、一、二の絵に震えるような感激を覚えた、美術品と思っていたアフガニスタンの石仏を爆破したのには呆れ怒っている。

最後に未だにわからないのが、日本の伝統文化に存在する流派、家元という言葉そしてその存在。もちろんその存在理由は臍げにわかるけれども、利用価値もあるのだろうけれども、反対に文化の行く手を阻んでいるように思う、あれがあると大きくなれないと思う。柔道が世界で通用しないように。

13-014 梅林 270213

「あ、あそこだ、あの辺り、ちらほら咲いている、ね」遠目に、かすかに花が咲いていそうな、赤と白の花が咲いているような境界が見え、幟がはためいている、人影もまばらに動いている。「もう“梅まつり”が始まっていますが、今年は気候が寒いのか、まだまだ満開までは・・・」と万博公園入り口のお姉さんの口調も堅い。「梅を描きたい」と飯橋先生の言葉に大阪城の梅林を想い浮かべたが、「万博が近い、歩いて行ける」と言われ、万博公園の中にも梅林があった事を、子どもを連れて見に行った事を思い出した。「こっちにいいのがある」と連れられた所に満開の木があった。少し離れた所に赤ではなく赤に近いピンクの花をこんもり精一杯花を付け広がっている。この木は見るだけでいい、至福の時が一気に舞いあがる、見ているだけでいい、梅の花だと伝わってくる。いつもの常套句「絵にも描けない美しさ」をひしひし感じる、描きたいとも思わない、撮りたいとも思わない、それほどいい。こんな形にこんもり花を付ける梅の木もあるのかね。

雪が舞い散るような寒さの冬は花が無い、山にも森にも川にも花が咲いていない、そんな時に椿、水仙、梅と少しづつ花を咲かせていく「待ってました」と古代から梅は大事にされていたらしい、桜よりもずっと愛でられていたらしい。梅の花を見て、尾形光琳作“白梅紅梅図”を一番に思い出す。その絵は屏風か襖に描かれた大きな絵で、両側にそれぞれ紅白の花が咲く梅の古木を置き、その真ん中に水の流れ、溪流の渦巻きを想わせる水の流れを抽象的に表し、それこそ其処を境に世界を二分して紅白を対峙させるという絵だ。紅白どちらの花が好きかと聞かれたら、今のオレの好みは白。本当はピンクが好きだけれどもピンクの梅は無いので白と返答するけれども、山を歩いていて白に少しピンクの色が入った花が時々現れたら、それこそ「いいなあ、きれいなあ」という数字が躍り上がる。そうですねえ、黄、赤、青、紫と山にも野原にも花が、米粒のような小さな花までであるが、白の薄いピンクが滲んだ花、滲まなくてももいいがその色が好みだ。とはいえそのうちしばらくしたらまた、別の色の物を愛でているかも、それとも踏みつけているかも。

此処の梅林も紅白の花、一重八重とそれぞれある、絵に描くには一重の方が描きやすいかな。いずれにしてもまだまだ蕾だけの木、咲いていても三分咲きぐらいだけれど絵のため、絵のスケッチに、一輪が咲いてその周りに五、六個の蕾を構図に選んだ。「描けたら見せて」と言われたら困るので先に申しますが、オレは描かない、描けない、そんなきれいな絵は描けませんと大笑い。梅の木は幹もいい。まだまだ小さい細い木でも、古色蒼然、堂々と立っている、古木に見える、苔むし、皮がめくれ、捻じれてごつごつ感を感じさせる。以前梅の染めを見たが、このごつごつ幹から染料を取りだしていたと思う。

「ここから先は写真撮影用三脚禁止」の立て札を見て、持参した重い三脚を畳んで中に入って行ったら、4,5組の写真連の団体、上等そうな重そうなカメラを三脚に着けて何人もが花の傍でじっくり時間をかけて撮影会をしている。カメラ、レンズ等で100万円を軽く超えそうな上等な機材、オレもあんなものが欲しいなと涎を垂れつつ、こいつら

こんな所人の迷惑も考えず集まって一番嫌われる手合だと思いつつ、「おっさんら（お姉さんも居たけれども）上手い写真撮りや～、楽しみや～」と腹を立てずにエールを送っている、オレも変わったものだ、以前ならぶつぶつ心の中で文句を言っていたはずだけれども・・・。

図版は近作の小さな絵。